

[翻訳]

神話と周縁部

ジーン・M・デイヴィスン『神話とポリス』(p.49-63)

翻訳 山口拓夢

はじめに

数多くのギリシア神話で、文明の中心を定めるという目的を達する旅で、「他者」が住んでいた「野性の」空間を、さまよう登場人物が通過するという場面がある。そのような神話は、神話創造の中心を越えるものを見極めて、中心がほんとうに中心であることを確かめることで、世界の境界線を定める。こうした周縁部の輪郭はたいいてい霞んでいて、客観的な地理の区分けから全くかけ離れている。世界の外れの場所やひとは、空間的にも性格的にも、中心からは二項対立的に離れている^(注1)。順を追って見て行くと、周縁部は二重の吸引力を持っている。周縁部は中心を定義し、遥か彼方の栄えある(神や英雄の)起源によって、ともに神話を作る社会を成り立たせる。あるいは中心部の人々は、遠くの民を自分たちの祖先の末裔だと受け止める^(注2)。さらに、文明化の業は、中心としてのポリスから離れた地方の英雄によって達成される(「アテナイのヘラクレス」として「周縁的に」文明を確定するテセウスがその一例だ)。そのような神話は、土地を巡る所有権と権力に対するポリスの要求を陰で支えている^(注3)。

ある程度、各地をさまよう神話は、探検や征服、貿易、植民地化といった、紀元前8世紀から6世紀の積極的な対外政策によって頭をもたげてきた、地理的な関心を反映している^(注4)。ヘロドトス(4.15)は、紀元前約630年にエジプトに商いの旅をする途中でスペインへ意に反して漂流した、サモス島のコライオスの予想外の旅について書いている。計画的な植

民地化は、ギリシア人を地中海世界の隅々まで分け入らせ、そのうえ無数の建国神話を産むことになった。こうした遠くへの旅と貿易の拠点作り、そして定住という流れは、地中海西部からフェニキアの沿岸へ、黒海からアフリカの港町へと歩を進め、ギリシア人を先進国から未開社会に至るまでの多様な民族と交わらせ、十分過ぎるほど多くの景色と経験に触れさせた^(注5)。当然のことながら、「現実の」地理の知識や実際の探検は、神話の旅や冒険の舞台作りに、生きた素材を与えた。神話は地理の知識を借用し、詳しく語るようになる。このことは、単なる背景より多くを意味する、語りの場を与えた。フランソワ・ハルトは、ヘロドトスについて書いた本のなかで、他者性という考えを用いて、この現象の徹底的な読み解きを試みた。神話は、「自分たち」とは誰であり、何者であるのかを、対比や比較を用いて明らかにするために、異国の地や異民族を「自分たちとは違う」とはどういうことかの具体例として使う^(注6)。

神話的な地理が文学に登場する例は、早くもホメロス讃歌や、ヘシオドスの作とされる『女系図』の断片にみられる^(注7)。散文の流れではヘカタイオスの『ペリエーゲシス（旅行案内）』すなわち「世界各地の旅」の断片がある^(注8)。これらの記述は、地名の後は簡単な説明で済ませているものもあるにせよ、明らかにあるいは暗に、広範囲な神話的な地理の知識を示している。オリュンポス、ハデス、至福の島、ヒュペルボレオス（北の種族）やエチオピア人のように神格化された遠方の人々、それに神々のすみかや死んだり変身した英雄の話がよく登場する。もちろんアテナイやテバイやアルゴスのような諸ポリスを始めとする歴史上の場所は、ヘラクレスやペルセウス、イアーソンやオデュッセウスといった生きた英雄の試練や冒険の舞台として、または英雄による文明建立の中心として、神話のなかで讃えられている。遠く離れた土地に辿り着く話には、英雄が戦う獣の姿をした人物や、体が二つに別れた人物も含まれてくるが、神話の見方からすると興味深いことに、よそ者の土地に住むケンタウロスやグリフィン、ゴルゴンにキュクロプス、サイレーンにアリマスポイ人といった他者性の担い手も、そうした話に含まれている。エジプト人のようによく知ら

れた昔からいる民族、それにキンメリア人やアマゾン人やスキタイ人のように、未開で正体がわからないようにみえる人々を、神話は利用する^(注9)。

放浪のための場所を提供するのが、神話的な地誌の特徴だ。神々は、聖なる仕事のためにしばしば旅する。ゼウスとポセイドンは（別々の時に）エチオピアへ旅して宴を催した。それは、アポロンがヒュベルボレオス人たちと食事を共にしたのに似ている^(注10)。デメテルは誘拐された娘ペルセポネを探すとき、広範囲の旅を余儀なくされた^(注11)。数多くの神々が自分の信仰地へと定期的に旅をする。英雄の旅には、試練を受けたり宝探しをすることを含む、目的がある。ペルセウスは一連の試練を受け、ヘラクレスは、旅の途中で、意に反して果たされるような、労苦や宝探しや命懸けの冒険を経験する。イアーソンは、試練や長旅に自分を導く、宝探しに乗り出す。オデュッセウスの家路への旅は危険に満ちているし、カドモスはエウロベを探して故郷を遠く離れる。

海賊もまた、多くの神話的な旅の特徴として登場する^(注12)。トロイでアカイア人はヘレネを探すことを要求したが、ネストルはその途中の略奪行為を思い出す。ミネラオスもオデュッセウスも、故郷に帰るときに、海賊のような振る舞いに及んだ（『オデュッセイア』3巻105-106、4巻80-85、9巻39-42）。『ディオニュソスへのホメロス風讃歌』は、エトルリアの海賊にディオニュソスが勝ったことを讃える^(注13)。フェニキア人たちは海賊としての神話的な地位を得ている。ホメロスは彼らの違法行為を、人さらいと奴隷貿易に限定して述べている（『オデュッセイア』14巻288-289、15巻415-484）。ヘロドトス（『歴史』1巻1）では、ペルシアの散文の伝承の語り部であるロギオイが、「フェニキア人はアルゴスからエジプトに渡ったイナコスの娘イオをさらった」と述べていた。ギリシア神話は、そのイオの旅を、詳しく面白おかしく、話の種として用いた。

イオの神話

イオがさまよう旅は、特別な部類に入る。イオは神ではないが、ヘラの

巫女として女神と関わり続け、その身代わりの役を果たしていると言える。また彼女は男性の英雄が演じる（ヘラクレスやテセウスのような）救済者とも違う。イオの旅はメデイアの旅と似ているが、イオはメデイアと根本的に異なっている。メデイアは彼女自身が魔法使いであり、異民族であって、ギリシアの英雄と旅をするが、彼女自身の中心は見慣れた世界の領域の外にあるからだ。メデイアの旅には目的があるが、イオの遍歴はすなわち狂乱の旅であり、目的地も定まらない。

けれども、イオの苦しみには目的がある。彼女は、建国の英雄エパフォスの母となる定めにある。この点で彼女の神話は、アウゲヤカリスト、ダナエ、テュロ、アンティオベなどの、ワルター・ブルケルトが「少女の悲劇」と呼んだ部類に入る神話と比較に値する^(注14)。動物への変身というおまけの要素も、多くの類話がある。イオは同じくゼウスに愛されて熊に姿を変えられたカリストと似ている。イオの牛への変身はエウロペの神話との類似は明かだ。重要なのは、エウロペもイオも、その旅で国をまたぐ一族の中心となり、建国の母となるところだ^(注15)。

イオの物語は、何世代もの時間と広い範囲の空間を占める、ギリシア神話の中でももっとも複雑で興味深いもののひとつだ^(注16)。核となる話はアルゴスに限られていて、そこでイナコス王の娘イオは、ヘラの巫女をしている。ゼウスは彼女に一目惚れをして、神話の初期の形では、ヘラの目を欺くために、彼女を牛に変えた^(注17)。ヘラはイオを見張るため、アルゴスを羊飼いに定める。アルゴスは、ゼウスの命令でヘルメスに殺される。ヘラはイオを責めさいなむためにアブ（あるいはアルゴスの幻影）を送って仕返しをする（アイスキュロス『救いを求める女たち』307-309；『縛られたプロメテウス』567-574,681-682）。苦痛あるいは恐れのために正気を失って、イオは極北から東方へ、最後はエジプトへと至るさすらいの旅を始める。そのエジプトの地で、イオはゼウスの息と優しい抱擁によって自らの姿を取り戻し、後にエジプトの最初の王になる息子のエパフォス（抱擁の子）を産み落とす。

次の伝説は、5世代後にダナオス王の娘たちがエジプトからアルゴスへ

と逃げてくる話（アイスキュロス『縛られたプロメテウス』853-856）で幕を開ける。アイギュプトスとダナオスはエパフォスの子孫で、一説ではアイギュプトスの50人の息子とダナオスの50人の娘の縁談にまつわる、兄弟間の争いを引き起こす（アイスキュロス『縛られたプロメテウス』855；『救いを求める女たち』392-395）。ダナオスと彼の娘たち（ダナイデス）は、イオの子孫だという理由をもとに、アルゴスに逃げ場を求める。アイギュプトスの息子たちがしつこく追ってきて、嫌がる娘たちに結婚を迫る。一人を除く全ての娘たちが父への誓いを守って結婚初夜に夫を殺す。ダナオスは後にアルゴスの王になり、一緒に留まった娘のヒュペルメストラとその子孫を後継者として、ギリシア人（ホメロスの言うダナオイ）の祖となる（注18）。

アルゴスからエジプトへのイオの旅を詳しく語るために、今度は個々の資料の違いを強調すると、ヘシオドスのヴァージョンは短い断片でしか残っていない（F124-126,294,296MW）。この神話の全貌は、アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』と『救いを求める女たち』という二つの悲劇で語られている。イオの足どりは、両方の悲劇で描かれているが、『縛られたプロメテウス』（848-851）のほうが、かなり詳しい（注19）。『救いを求める女たち』（547-564）ではダナオスの娘たちによって語られる旅は、簡単で端的な描写である。イオは始めに小アジアの各地すなわちフリュギア、ミュシア、リュディアを動き回り、キリキアとパンピュリアの山々を越える。それから名の知れぬ川や、肥沃な土地や、「（キュプロスやシリアなど様々に受け取られてきた）穀物が豊かに実るアフロディテの土地」から「雪の絶えない牧草地」やナイル川に至る、不確かな足どりが語られる。

『縛られたプロメテウス』でのイオの足どりは、より込み入っている。というのも、プロメテウスは最初にイオの未来のさすらいの運命を予言していて（707-735,790-814）、次に自分の拷問の場所に彼女が至るまでの今までの道のり（828-841）を語っているからだ。地理上の必然から言って、イオはまずドドナに行き、それから（イオの名を戴くことになる）イオニア海へ赴き、それから北東部へ移動してスキタイの遊牧民のところに行き、

ようやくプロメテウスのところへ至る。イオがプロメテウスのもとを去るとき、イオはカリュベスと呼ばれる無愛想な金属細工師たちの土地を過ぎて、コーカサスを渡って黒海の岸へ向かおうとしている。

イオはアマゾン族が住む南に向かい、キンメリアの地峡（この地域はイオの訪問の後、ボスポロスすなわち「牛の渡る所」という名がつくことになる）を渡ってヨーロッパを離れ、アジアに入る。今やイオは東方の未知の土地にいて、そこからキステネのゴルゴンの平原へと海を渡る。イオは（「老婆たち」と呼ばれる）ポルクユスの娘たちやゴルゴンたちの側を通り、ゼウスの猟犬（グリフィン）やプルート川の側の一つ目の騎士アリマスポイ人たちの所を通過する。ここを通るとき、ナイル川がビュブリン山脈から流れる大滝に向かい、それからイオはニロティスの土地に着いて、そこで自分と子孫がカノボスという植民都市を建設するように命じられる（注20）。

さすらいの神話の意味

イオがさまよい、よく知られた世界の外へ出てエジプトの地に辿り着き、その始祖としてその地に足跡を残すのは、牛に変身した姿のできごとである。牛を追うのは古い主題で、そのなかからアルゴスないしギリシアの型として特に発達したものとして、イオの物語も受け取れる。イオの牛への変身と人間への逆戻りの話は、他のいくつかの意味合いも含むとは言え、イオの物語のなかの遍歴と定住という基本テーマを補強する。イオ探しの結末を定めるために、神話はエジプトで彼女を人間に戻し、そこでゼウスの抱擁を受けさせ、子どもを身ごもらせる（アイスキュロス『縛られたプロメテウス』848-851）。イオの子孫はカノボス市を建設することになる（『縛られたプロメテウス』814-815, 846-847）。

ギリシア神話のなかの、都市建設の印としての獣のモチーフは、イオを越えて続いてゆく。もう一人の子孫エウロベは、自ら望んだのではないが、二つの大きなさすらいと、獣の話を含む都市建設の、きっかけとなる。ゼ

ウスは、フェニキアのテュルスから後にヨーロッパと名付けられる土地にエウロペを誘い出すために、牡牛に身を変える。そしてまたカドモスは、エウロペを探してフェニキアからギリシアまで旅をしてから、後にテバイの町になる土地へ牛を追って辿り着く^(注21)。さらに後の子孫ヘラクレスは、獣の話を含む、さすらいの冒険と都市建設の神話の主役である^(注22)。

彼がゲーリュオンという無数の牛の頭を持つ怪物を捕まえたあとスペインから家路に着くとき、羊飼いとともにシチリア中を旅する^(注23)。そこで子孫のためにその地を選び、エリュクス市の都市建設を成し遂げる^(注24)。神話ではさらに、この獣とともに遠回りをして家路につく途中、ヘラクレスはスキタイ人に会っている（ポントスのギリシア人たちの話によれば、である。ヘロドトス、『歴史』4.8-10）。イオとは結びつかないが、カドモスの件とよく似た例は、まだらの立派な牛を追って、イリオン市を建設することになる土地へ行き着いた、イロスの神話だ（アポロドロス『ギリシア神話』3.123）。もっととほうもない話で言えば、エジプト人たちは、天の牛が、死んだファラオを天の王座まで導くと信じていた^(注25)。ギリシア人がイシスないしハトルの角の生えた化身の姿に、イオに似たものを見ていたという事実（ヘロドトス『歴史』2.41）のなかに、イオとの微かなつながりがみつかると。それにハトルの多くの呼び名のひとつは、「天の女王」なのだ。

牛という昔からの基本的な題材は、イオの神話では、強い対比で描かれる、旅とさすらいの、練り上げられた話法と結びついている。旅路は「近く」から「遠く」へ、「今」から「そのとき」へ、「自分らしさ」から「他者性」へ移って行く。これらは、「さすらいの終わり」と「さすらい」の神話の語りの対比のなかに含まれた、思考の諸相である。最初の二つの、場所と時の対立について言えば、都市建設に関するギリシアのさすらいの神話は、ふつう、地中海の近づきうる岸を越えて内陸を移動する、勢力拡大の旅である。イオの遍歴は、彼女をギリシアからスキタイ、小アジア東方、ナイル溪谷へと連れて行く。

彼女の子孫ヘラクレスもまたスキタイと小アジアを訪れ、北アフリカや

エジプトにも足を運び、スペインやイタリア、シチリアといった西方を行動範囲に加えている。アルゴ船の勇者たちはイオッコスから黒海を通り、レムノスで休止して小アジアの岸沿いに移動して、コルクスへと直行する。けれども帰路はふつうは利用しないドナウ川やポー川、ローヌ川へと北側に逸れて、それからティレニア海、北海を通り、クレタ島を横切って南回りでイオルコスに戻る（ロドスのアポロニオス『アルゴナウティカ』4.303-1781）。

イオの物語は、地理やその他の対立の極みの極端な代表例だ。そのように地理的な対比や対立が顕著なところは、特にアイスキュロスの神話の扱いに目立つ。北の端のスキタイ人の扱いは、南の果てのエチオピア人と似たところがある。地理的な特徴や境界線は、対立的に組み合わせられることもある。スキタイの北東の（実在しない）ヒュブリステス川は、アイスキュロスがアイチオプスと呼んだ上ナイル地方と反対だ。同じように、コーカサスはスキタイとアジアの境界線となり、（実在しない）ビュブリネ山脈は、エチオピアとエジプトの境界線となる。

これらの冒険には神話的な別世界感覚が漂っているにもかかわらず、旅の大半は、既知の人々が住んだ所として、確実に知られていた地方で話が展開する。幾多の時代に、小アジアは、ヒッタイト人が多く住んでいたばかりか、しばしばヒッタイト人の領地となり、後には良く知られる通りフリュギア人やリュディア人の国となり、また、少なくともホメロスの叙事詩が定着した時代からギリシア人にはその名が知られていた、より勢力の弱い、都市化した部族の支配下にあった。アジアは途切れることなく、古代ギリシア人の知っている時代はいつでも、フェニキア人やヘブライ人、ネオ・ヒッタイト人、アラム人、ウラルトゥ人やアッシリア人、ネオ・バビロニア人、最後にはメディア人とペルシア人に植民地化され、支配されてきた。エジプトはどうしても癖のある独特の個性を持ち、それは王朝の移り変わりに影響されなかった。スペインと北アフリカの港町は、フェニキア系のカルタゴ人の交易地で覆い尽くされ、北アフリカ自体は、多くの部分が、カルタゴとリビアに牛耳られていた。イタリアは紀元前8世紀以

降はエトルリア人、イタリア人、新興のローマ人が住み着き、他方でシチリアは西の端まではカルタゴ人の支配下にあり、その他の部分には、隈なくシケル人とシカン人が住んでいた^(注26)。これらの文化はすべて、早い時期にギリシア人と接触があり、すでに知られたものだった。それだけに、こうした土地での神話的な冒険は、既知の文明が起こる前の、神話的な時代に位置することになる。事実、いくつかの神話の基本的な役割は、これらの文明の歴史的な起源を説明することだった。これが適切に行われない場所では、冒険は、方位や「南方」とか「アジア」などの幅広い地理のことばで示される、詳しくは特定されない大まかな地域で展開する。

さすらいの物語は、大昔という設定と、場所的なエートスすなわち「特徴」の極端な例の、組み合わせや対比のうえに語られがちだ。特に地の果ては、社会制度や人間のタイプの極端な例の比喩となる。スキタイ人は遊牧民として描かれ、明らかに東方の、彼らの土地の彼方にある（ヒュブリスすなわち傲慢さを持つものという意味の）ヒュブリステスという川の名前は、（『縛られたプロメテウス』717-719を参照）スキタイ人が自由奔放に暮らしていて、自然のなかで野放しになっていることを指す。カリュベス人は、プロメテウスの台詞の教えによると、非友好的で付き合いを避けるべき人々である（『縛られたプロメテウス』714-716）。カリュベス人たちは、鍛冶屋の集まりだが、ギリシア世界のそうした人々とは違い、ポリスのふつうの経済構造に、居場所を持たない。彼らは、ホメロスに出てくる遍歴の職人の有益な役割さえ果たしていないようだ（『オデュッセイア』16巻383行）。プロメテウスの予言によると、男を憎むアマゾンの女たちも、イオには優しくする（『縛られたプロメテウス』723-728）カリュベス人と同じく、アマゾンの女たちも、社会的に逸脱した、ポリスやギリシアの家族制度のしきたりを拒んだ集団を表わしている^(注27)。

「東方」とくくられる地方に着くと、イオは全く未開の地に来たことになる。わずかに人間らしい感触は、一つ目の騎士アリマスポイ人から得られるのみだが、彼らは明らかに、スキタイ人のような遊牧民である。また、イオはグライアイ（洞窟に住む魔女）やアマゾンの女たちよりはっきりと

人間に嫌われるゴルゴンたち、それに加えて鷹とライオンの混ざりあった生き物グリフィンたちなどの側を通して、恐ろしい旅を続ける定めにある。奇妙で驚きの多い東方の旅の好対照となるのは、彼女の子孫ヘラクレスの、危険な西方への旅である^(注28)。

アイスキュロスによって示された神話の舞台は、ピンダロスの『イストミア』6.22-23やヘロドトスの『歴史』の地理や習慣の描写でさらに詳しく語られる。ピンダロスにとって、極北の民族を代表するのはスキタイ人よりも、むしろヒュペルボレオス人だった。だがヘロドトスもピンダロスも、最南端の民族がエチオピア人だという点では、同意しただろう。空間的な遠さは、気候の厳しさだけでなく、暮らしぶりの奇妙さも含んでいた。

(『歴史』2.2のフリュギア人への意見と矛盾するが、)ヘロドトスの『歴史』2.15によれば、エジプトは最古の文明発祥の地である。他方、スキタイ人はほんの数千年の歴史しか持たない新興の民である(『歴史』4.5及び4.7)。黒海のポントスには無知な民が住む(4.5)のに対し、エジプト人がいちばん賢い^(注29)。

エジプトとスキタイの(気候や歴史や知識の)対比的な組み合わせは、同じくらい共通項を持つ組み合わせでもある。どちらも他の土地のしきたりを受け入れるのを嫌っていて(スキタイについては『歴史』4.76エジプトは2.95)、どちらも辿り着くのが難しく、一旦行ったら帰れない土地の代表例とされた(スキタイは『歴史』4.46, リビュアは3.26及び4.179)。

周縁部とポリスの自己認識

イオやヘラクレスなどの旅は、人が住む世界やその外に達し、ギリシア人の自分らしさの感覚に影響を与える。地理的な描写の外郭は、ギリシア人が地中海世界において自分たちが中心だということを心に刻む方位計となる。こうした話は、同時に差別化と同一化を行う。ギリシアではないものの経験は、ギリシア的なものの確認と強化に役立つ。さすらいの神話は、そのような伝説が、他民族の他者性の度外れな観念だけでなく、——広い

意味での——ギリシア中心の世界観をギリシア人のなかに呼び覚ましたことを示している。これは、自民族中心主義がはっきりと認められる典型だ。

自分たちの神々に各地の地方色を与えるというギリシアの伝統は、とりわけこうした神々自体が、地方の文明の聖なる起源の神話で、ある役割を演じていると考えられる場合には、ギリシア人が、自分たちが世界の中心だという感覚を育むための、印象深い、地理的な話題の種を提供した。神々はオリュンポスに中心を持ち、他方、ミュケーネ時代から続いているデメテル信仰がたまたまギリシア全土に広がりを見せたエレウシスに、冥界の主な入り口のひとつがあるとされた^(注30)。オンパロスすなわち「へそ」という呼び名で知られているデルポイの石は、明らかにギリシア人にとってオイクーメネーすなわち「人の住む土地」の中心を指す目印だった。このオンパロスのスキタイの類似物は、異邦人にとってそれを見つけることは戦の火ぶたを切ることであった、偉人のセーマすなわち王の墓に代表される（ヘロドトス『歴史』4.127）。このように、ギリシアは神話上のペリエーゲーシスすなわち「世界旅行」との関係で地中海の横軸の中心を占め、オリュンポスと冥界で示される上と下の縦軸の中心に位置する^(注31)。

ここにはホメロスの時代から続く、旅と知恵の明らかな同一視がある。オデュッセウスは遠くをさすらい、多くの町を見て、多くの人の心の機微を知るに至る^(注32)。リュディアのクロイソス王はアテナイのソロンに、「知恵と旅の件で」多くの噂を聞いたと言い、「知見のために多くの土地を旅したそなたの知恵を伺いたい」と告げる（ヘロドトス『歴史』1.30.2）。これらの話には、ふたつの明らかな対立項が見られる。さすらい人が通った土地は、危なく恐ろしい地帯か、（いつの時代も）行きたくても行けない地帯である。危険と恐怖は英雄の冒険話によく有ることと片付けられるかもしれないが、奇妙な誘惑の要素は、思いがけない刺激的な対比を生んでいる。「至福の島」のほかにも、暮らしを立てるのに目立った努力を必要としない、ロートパゴス人たちの国やカリュプソの島は、明らかにこの世の外であり、喜ばしい土地という言い回しは、そうした場所が理想の実り豊かな国だと示している。

ヒュペルボレオス人やエチオピア人の住む土地は地理的な対極であるばかりか、手の届かない幸せの例として思い描かれている。エチオピア人は背がもっとも高く、この上ない美形という人間の理想に達している（ヘロドトス『歴史』3.17-24）。ヒュペルボレオス人は満ち足りた穏やかな生活に達していて、北国にもかかわらず、年に二度の収穫がある、肥沃な国に住んでいる（アイスキュロス『供養する女たち』372-379; ピンダロス『ピュティア祝勝歌』10.46-59）。どちらの人々も実在の土地に住まうと考えられていたが、神々でなければ訪れることができないとされた。エチオピア人にもてなされたゼウスやポセイドン、それにアポロンの年に一度のヒュペルボレオス人との滞在を思い起こそう（『イリアス』I 423-424; 『オデュッセイア』i 22-24; ピンダロス『ピュティア祝勝歌』10.53-55）。ホメロスはキュクロプスの洞窟の隣の無人島を詳しく描写していて、植民地にふさわしいという、まさしくギリシア人的な見方をしている（『オデュッセイア』ix 121-135）イオの旅路では、彼女が小アジアを去って南に向かうとき、他の言い方では特定されない「麦もたわわなアフロディテの土地」に足を踏み入れる（アイスキュロス『救いを求める女たち』555）。似た言い回しは、エジプトの三角地帯を「少ない努力でよく実る（ヘロドトス『歴史』2.14.2）」「美しい野の（『オデュッセイア』x iv 263）」「すべてを育む（アイスキュロス『救いを求める女たち』558）」土地だと描写するときに使われる。

ギリシア人の見方では、麦もたわわな土地は、英雄以後の時代を生きる人々の「至福の島」の言い換えであり、紀元前7世紀と6世紀の植民地化の企ては、そうした土地の探求に端を発している^{（注33）}。有史時代では、小アジアのペルシアの支配から逃げ延びた者たちのための好ましい実り豊かな土地であり（ヘロドトス『歴史』1.170）、あるいはペルシア帝国の拡大の実り豊かな企て（『歴史』6.2.5.106）だとヘロドトスが言う、サルディアの名が浮かぶ。すでに「至福の島」は、ヘシオドスによってイタリアの近くの有るとされていて、西へと植民地化を進めようとする心境は、ヘラクレスの旅の神話的な文脈で育まれた、移住の物語によって示されている。ホメロス（『オデュッセイア』iv 563-569）もヘシオドス（『仕事と日々』

167-173) も、幾人かの英雄たちは、海のそばの地の果てにある楽園へと、生きながらにして運ばれると語っている。ホメロスにとって楽園はエーリュシオンと呼ばれる土地であり、ヘシオドスにとっては「至福の島」だった。恵まれた英雄たちのこうした安息の地は、ホメロスの叙事詩では一般に人々を涼ませる西風の冷気が海から吹いてくる西方に定められている。ヘシオドスは楽園をより具体的に、アグリオス人やラテン人、それにテレゴノス人がテュリュセニア（エトルリア）人を統治するイタリアの近くに特定している。すなわち「至福の島の隅へとはるばる来て（『神統記』1011-1016）」という箇所である（注34）。それでも、こうしたあらゆる理想の風景は、イオのさすらいが遊牧民やアマゾン人や怪物たちの直中で行われたように、ポリスのなかで経験する生活とはかけ離れたものを指していた。

ギリシア人にとって、大まかで幅広く通じる文明と未開の区別とは、定住か遊牧かで見分けがつくものだった（注35）。永住者同士では、土着の民か移民の出かという、より微妙な違いが意識され、政治的な効果を奏した（注36）。

アテナイ人が土着の民だという主張は残りのギリシア人たちに反論の余地を与えることはなく、アテナイ人は他のギリシア人（とりわけスパルタのヘラクレダイたち）をよそ者だと見下して安心した（注37）。ヘロドトスはアテナイ人を、先祖ペラスギ人の確かな生き残りのひとつに数えられると言っている（『歴史』1.57-58）。

イオの神話に取り込まれたのは、彼女が土地の河の神イナコスの娘だと語られていることからわかるように、彼らがアルゴス地方の土着の民だという主張だ。ダナオスの娘たちが到着したときに、ペラスゴスが後の歴史でアルゴスになる土地の王であるところに、おかしい皮肉がある。すなわちこの話では、アテナイ人と同じように、アルゴス人もまた旧来からのペラスギ人なのだ。実際、アイスキュロスの『救いを求める女たち』254-259では、ペラスゴスの統治はギリシア全土を含むまで広げられて、歴史的には一度も実現しなかった全ギリシアの統一を表わしているのだ。

ギリシア全土を結びつける世界観

紀元前6世紀と5世紀のギリシア人にとって、イオの神話の主立った意味は、イオへの自分たちの結びつきを見て取るほど拡大解釈するまでに、自分たちの歴史がそのうえに立つ、伝説的な系譜を権威づけ、正当化することだった。イオはギリシアとエジプトのあいだに疑いようもない結びつきを与える。疑いようもないというのは、もしエジプト人が「人類の始まりから」存在していたと正しくも見なされていたなら、その文化全体の非ギリシア的な性格にもかかわらず、彼らはギリシア人の先祖に違いないからだ^(注38)。

この重要な結びつきの捏造に加えて、イオの物語は、主要なギリシア人（ダナオスの子孫、アルゴス人、後にはヘラクレスの子孫ヘラクレダイ）の「特徴を表わす」神話として働く。それは後のフェニキア人やメディア人、ペルシア人の場合と同様だ。ヘラクレスを中心とする後の逸話も、数世代による、不可欠な、時間的な枠組みを与える。このように、自らの先史時代のギリシア人の見方の基礎を築いた旅行記や系統図に及ぶ範囲で、イオの神話はこうした捉え方の中心だった^(注39)。

アイスキュロスは、イオの物語を全ギリシア規模のみならず普遍的な見方で位置づけた。『縛られたプロメテウス』の旅行記を通じて、後の地中海文明の元祖としてのイオの出現によって、観客にギリシア人の起源を示したので、人々はそれぞれの種族の名前を得て、お互いに呼び合うことができるようになった。

『縛られたプロメテウス』では、エジプトの名ははっきりとした形で出てこないが、ナイル河やアイチオプス河の名で示される。シリアは土地の境目としてだけ語られる。イオから5代あとのダナオスの娘の時代まで、ペラスゴスはアピア、ダナエと呼ばれる昔ながらのギリシアを統治して、ペルセウスやヘラクレスの時代に至る^(注40)。

早い時点で人類はすでに存在するが、別々の文化、人種の区別、政治的

まとまりはまだないとされた。主な地域の土地の名前は、イオが来るまで存在しなかったので、示されない。それゆえ、イオ以前にはエジプトの名はなく、ナイル川があるのみで、怪物のすみかを除けば、シリアーパレスチナ地方はなかった。スキタイは二つの理由で特に際立っていた。まず、イオの血を引くものがないこと。それに加えて、先史時代から異民族が住み着いていて、それが有史以降に続いていること。すなわちスキタイは、時代を越えて同じ場所であり続けているのだ。

アイスキュロスのイオの話の用い方は、それに先立つ文化がなかったという前提の上に立った、文明の挫折知らずの発展、成長のいきさつを描くというものだ。イオは歴史的にポリスで定義されたギリシアの出身ではなく、ギリシア以前、あるいは、こう言ってよければ、ポリス以前の地中海地方の出身である。『縛られたプロメテウス』には、イオの出身を強調する台詞はなく、彼女と地中海世界の未来だけが述べられている。けれども、アイスキュロスの意図はさておき、彼のイオの話の扱い方は、紀元前5世紀のギリシア中心の考えを満足させる解釈を許す。すなわち、エジプトは文明の始まりの土地だと認めざるを得ないが、その起源は元を正せばギリシアだと言える血筋の出身で、ギリシア人が「ギリシア」だと考えている、ポリスができた後のギリシア全土を含む土地の出だというわけだ。

イオが地中海地方の有史以来の民族の重要な祖先の役回りを果たしているように、その子孫のヘラクレスもまた、地中海文明の立て役者であり建国者である。ヘラクレスの旅は、すでに名を知られた世界の具体的な遍歴の物語を成していて、いたるところで彼は敵を鎮圧し、人や獣の野蛮さと戦う。このようにヘラクレスは、イオが系図の道筋をつけた人類の未来を確かなものにする^(注41)。

地中海の地形のなかの実際のギリシアの中心性が、さまざまなさすらいの神話によって強められた。ギリシア人たちが気候や習慣や文明の発達の場合の色合いの違いを計る感覚を育むのを、そうした神話は助けた。こうした伝統の蓄積があるので、ギリシア人がポリスの発達を野蛮の対極と見なすのもうなずける。ギリシア以外の地中海世界に向けられたこの地理

上の見方は、系図の一貫性に基づく信念で裏打ちされた。ギリシア人内部の諸族の混乱や植民地政策による地理的な拡散にもかかわらず、全ギリシア世界はイオを中心とする系図に結びつけられた^(注42)。

ギリシア以外の土地の特異性と異境性は、拡大された系図が与える仲間内の一体感と結びついて、ギリシア人たちに自らの個性を意識させた^(注43)。他の民族とはことばも習慣も政治の発達の度合いもお互いに違うのだという初期の感受性は、しだいに他の民族とは折り合いが悪いという強い拒絶感へとかたちを変えた。ギリシア人社会の一体感の発達は、世界がギリシア人と異民族の区別で成り立っていると見る、ギリシア人の見方と切り離せない^(注44)。具体的な地理の探検や未開の地との出会いへの反応とも言える神話のなかのさすらいの物語は、ギリシア人の自分らしさの表現であるだけでなく、異民族がギリシア人との接触で作り出した自分らしさの表現でもある^(注45)。イオの神話は、経験と風習の違いを山ほど盛り込み、豊かに枝別れして発達した多くの国に共有される、ポリス以前の背景の貴重な遺産として、ポリス時代のギリシア世界を捉える枠組みを、ギリシア人たちに与えたのだと言える。

Jean M. Davison. *Myth and the Periphery, Myth and the Polis*.
Cornelle. U.P.1991.p49-63. Translated by Takumu Yamaguchi

注

1. 奇妙なことに「他者」は対立者と自己の似姿の両方を意味する。
Hartog 1980.226および J. Nagy 1985.10参照。
2. Hartog 1980.45およびBickerman 1952.65-81. 特に68および77-78参照。
このように神話は、自らが意味するものと矛盾する意味を正当化するために、解釈されたり拡大されたりすることがある。「この時ギリシア人は、自分たちの同類により近いものを感じ始めていた。そしてギリシア人と異邦人との区別には、詩人とその追従者の作品が、ギリシアの都市と家系と、異邦人のそれとの関係への信念を抱かせた。(Braun 1982.31)。
3. 違った諸都市の伝統の葛藤については、Wickersham 第1章参照。

4. Ramin 1979.7-10.
5. Boardman 1980およびRamin 1979. 9-10.
6. Hartog 1980特に224-269. 同様に非農耕社会との出会いの要覧としての『オデュッセイア』の解釈についてはVidal-Naquet 1986 b 参照. アイルランド神話のよそ者の役割についての同様の解釈についてはJ. Nagy 1985参照. 追放の政治的比喩としての放浪譚については以下を参照. Bernand 1985.15「悲劇的英雄は本質的に放浪者と定義される. ギリシア時代最大の人間の不幸は『根なし草』だった.」
7. 追放を含む地理的な知識の集成としての断片集についてはF 150-157 MWおよびWest 1985. 84-85参照. F150は地底人やピグミー人や肌の黒いエチオピア人, リビア人, スキタイ人といった特異な人々を描写している. F151 (=FGH Ephorus 70 F 42) は少なくとも一覽表の一部はこの種の資料で世界来訪に言及している, 豊かなものであることを示している. 広大な地方への広がりへ導く, 系図の筆頭近くのイナコスの子孫の扱いについては特に疑問点が残る. (West 1985.84,177-178 参照).
8. FGH 1 F 36-359.
9. スキタイ人の発する特別な魅力についてはHartog 1980参照.
10. Ramin 1979.74-75,69参照.
11. Picard 1927参照.
12. 歴史的にギリシア人自身が初期においては活発に海賊を実行していた.
(Thucydides 1.5-7 ; Herodotus 1.166).海賊と貿易の区別はしばしばあいまいだった. フェニキア人 (Thucydides 1.8) およびエトルリア人 (Pallottino 1975.82-84) は商人としても海賊としても知られていた.
13. *Homeric Hymn* 7 ; Strabo 6.2.2 C267はギリシア人が植民市を建設する前, 彼らがシチリア島に近づいた時エトルリア (テュレニア) 人の海賊へ人々が持った恐れについて述べている. 5.2.2 C220および5.3.5 C232も参照.
14. Burkert 1979.7:「英雄の登場の前触れとしての, 出発と隔離と強奪と苦難と救いの一連の流れ」
15. West 1985. 84参照.
16. Hesiod F 124-126 MW (女系図より) および294, 296 (MerkelbackおよびWest 1983. 232に加えられた証言によるCarystusのCliniasに属する*Aigimios*より) 参照. スキタイ旅行記の奇妙な資料はProconnesusのAristeasとアリマスピア人の物語はおそらく ca. 658B.C. (FGH 35およびHerodotus 4.13-14 ; Bolton 1962参照) の年に書かれた. 古代文学のイオの姿の実りある議論や壺絵の図柄はBernand 1955およびYalouris 1986に載っている. 議論や解釈のより広い一覽はLinthorpe 1910 ; Severyns 1926 ; R.D. Murray 1958 ; Hicks 1962 ; Wehrli 1967 ; Albini

- 1975; Duchemin 1979; Gourevitch 1979参照.
17. イオはイナコスの娘である. けれども女系図 (Hesiod F 124 MW) では彼女は系図でより高い地位にある. イナコスとペイレンの娘である. 後世の別伝では牛に変えたのはヘラである. そしてゼウス自身牛になって「交わりを求めた」.
(アイスキュロス『救いを求める女たち』299-301).
 18. ダナオスを通してのイオの子孫のアルゴスへの帰還の一文は主要な箇所である. けれどもまた輪の中心としてそれは単なる中心である. それ以外についてはWest 1985.177-178参照.
 19. この地誌や系図の多くはHerodotus第2巻の随所に載っている. これらの記述の注釈についてはLloyd 1975,1976および1988参照.
 20. アイスキュロスの地誌についての最近の議論についてはBianchetti 1988参照.
 21. Bühler 1968およびEdwards 1979参照.
 22. Lacroix 1974.38, 50.
 23. Hesiod *Theogony* 287-293, 979-983; Lacroix 1974.53, n. 6 参照.
 24. Herodotus 5.43; Lacroix 1974.38はMotyaとSolousを挙げているがEryxの名はない.
 25. Bergman 1968.127 (*Pyramid Texts* 1153-1154).
 26. Trump 1980.229-293参照.
 27. Tyrrell 1984.xiii-xixの議論を参照.
 28. Ramin 1979.105-119およびLacroix 1974.36-38および50, n. 5 参照. 西への探訪を含むイオの旅行記はプロメテウスが彼女に言及する時, 示されている (『縛られたプロメテウス』839-841). すなわち彼女はイオニア海を通ってきた.
 29. エジプトの知恵はエジプト文化の優越性や初期ギリシアへの影響に関するヘロドトスの発言に示されている. (2.4.1-2; 2.54-55; 2.160.1). Bernal 1987.98-101. 参照.
 30. Burkert 1985.285-290参照.
 31. 地中海と黒海 (東西軸) およびドナウとナイル (南北軸) に分けられた, 地平線の左右対称の世界の一般的な概念と, アナクシマンドロスの理論に基づく議論について, Kirk, RavenおよびSchofield 1983-133-137およびKahn 1985.76-85. (単一の軸を持った) 垂直線の概念についてはTartarosについての『イリアス』8巻13-16 「冥界は天が地から離れているごとく遠くにある。」およびHesiod *Theogony* 720-725参照. 根強い伝統的図式の手堅い把握では, 奈落, 冥界, 大地, オリュンポス, 天界の順である. 古代の宇宙創成記の神話, 視覚的側面の徹底した考察についてはBallabriga 1986参照.
 32. 非常に多くの放浪をして…多くの人々を見て町と考えを学んだ. (『オデュッセイア』i 1-3).

33. Boardman 1980. 153 (Cyrene) ,178-180 (Sybaris, Croton, Metapontum) , 186 (Selinus) , 229 (Po valley) ,229-232 (Macedonian and Thracian coast) , 241-242 (東プロボンティス沿いのMegariaの定住地) 242, 244 (黒海) .
34. 西方の(また諸国の) 都市の建国者としてのヘラクレスについてはLacroix 1974.37-39参照.
35. そのような区別についての印象的な要覧についてはHartog 1980.208-209参照.
36. Nilsson 1951.14によればアテナイ人とアルカディア人は原住民であると主張する点で独特である. アテナイの原住民説についてはLoroux 1979および1981参照.
37. Loroux 1979.3-7. 生粋のアテナイ人と市民権を持たない外国人居住者には地理的な区別がある. 他のギリシア人に対するアテナイ人の特権を常に思い出させる区別であり原住民と移民の二項対立のモデルとして理解できる.
38. Herodotus 2.15 ; Hartog 1980.193, n. 5 およびBernal 1987参照.
39. Lloyd 1975.180-182.古代中東の多様な文化は旅行記と系図に似たような関心を示した. しばしば原住民の資料の助けが付け加えられた. (アビドスの石版はエジプトの王とアッシリアの王の一覧を列挙しているが, ともに王の系図を強調している.)
ヘブライ人は歴史の感覚を世代という語 (toldoth) で表現した. 創世記10-11は十世代目のアブラハムへ至るノアの三人の息子の家系図を記している. そこでイスラエルの実際の「歴史」は始まる. ここには子孫の系図に強調があり多くの家族や人民が生まれることでの地理の拡大がある. そこでこの系図は領土の主張を明文化している. エジプト人とアッシリア人の神話的な系図はギリシアの伝統のように実際の地理と現実の旅程が重なり合う. ハムラビ時代の遠征を挙げた文章についてはHallo 1964参照.
40. アイスキュロスではギリシアとギリシア人への言及が稀に見られる. けれども異邦人とギリシア全土の習慣との対比を強調する文脈においてのみ言及される. (『救いを求める女たち』 220, 234, 237, 243, 914) .
41. Lacroix 1974.41.
42. 系図の碑文についてはWest 1985.177-178参照. アルゴスを中心とするアルゴス人だけの世界観として,ある観点からこのことは認められるだろう.
43. Schaefer 1955.281は同じ考えを表明している. 「宗教と神話は歴史の始まりの意識の器となる」.
44. Schaefer 1955.282.この我々とよそ者の区別には,もちろん同様の区別がある. 古高ドイツ語 (diutisk「人々の」)と新高ドイツ語 (deutsch「ドイツ人」) に対して古高ドイツ語 (walhisk) と新高ドイツ語 (welsch「外国の」) などである. (古高ドイツ語のWalh「ローマ人」,古英語のWealh「ケルト人」という表現は,誰に囲まれているかで規定されている.) ヘロドトスは軽蔑することなく非ギリシア文化の違いを評価しているが, 軽蔑の意味がアイスキュロスのペラスゴスとイオの子孫の異邦人との交わりに見られる. (Friis JohansenおよびWhittle 1980の『救いを求める

女たち』746-747の注釈を参照.)

45. Bickerman 1952 参照.